

## ドミニカ共和国派遣団団長報告

団長 東 良 信

### はじめに

近年、個々の国だけでは解決できない諸問題が発生するグローバル化が進展しており、世界の国々が協力して対処していく必要性が高まっている。この協調関係の基礎は、国と国、人と人との信頼関係・相互理解であり、各国の相互理解の促進に資する国際交流の重要性はますます高まっているといえる。

今回私が参加した日本青年をドミニカ共和国に派遣する青年海外派遣事業は、このような考え方にに基づき、日本と諸外国の青年の交流により、青年相互の友好と理解を促進するとともに、青年の国際的視野を広げ、次代担うにふさわしい国際性を備えた健全な青年を育成することを目的として、皇太子殿下のご成婚を記念して平成6年から実施されているものであった。

参加してみて感じたことは、ドミニカ共和国は予想以上に国際青年育成には適した国であり、また、プログラムが実によくできていたことである。ドミニカ共和国派遣団のそれは、大統領、下院議長、青年省大臣への表敬訪問とともにドミニカ共和国青年との交流の機会がふんだんに設けられており、青年相互の友好と理解が促進できるようになっていた。教育・環境・文化などの課題別視察やホームステイなどに加え、地元青年との合宿ディスカッションなど、日本青年とドミニカ共和国青年とが国を超えて話し合える場、ともに体験できる場が設けられ、これらの交流体験は、日本青年にとって、国際的に通用する考え方とはどのようなものかを知り、国際的な対応力を身に付ける絶好に機会となったと思った。

### 1. 事前研修及び派遣団の結成

7月4日から9日まで国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて最終選考を兼ねた合宿による事前研修があった。この研修では、訪問国事情、プロトコル、ディスカッションなどについての講義に加えて、団の目標決定や活動日程検討などの団別研修がなされた。

ドミニカ共和国派遣団の目標は、“ともに種をまく仲間～大きな花、たくさんの花～”であった。・・・私たちはドミニカ共和国派遣団として、2国間に可能性の種をまいてきます。この事業に対する個人的な想いや目的は

それぞれバラバラですが、この事業を「きっかけ」にしようとする気持ちは皆同じです。可能性の種類や大きさは異なっても、一緒に種をまく仲間でありたい・・・そう考えてこのスローガンにした、というものであった。また団のルールは、①いつでも挨拶は全力！②相手のことを尊重しつつ、ため口で！③5分前行動！であった。今回の主役である団員たちは個性豊かであり主義主張が違いますがゆえに衝突も多くあった。しかし団別研修での徹底した話し合い、今まで経験したことのないような話し合いで一定の相互理解と協調感が醸成された。「これで初めて団の結成ができたな」と感じた。

事前研修のなかで意義深く感じたのは、在京ドミニカ共和国大使館訪問、外務省担当官によるドミニカ共和国についてのレクチャー、そしてドミニカ共和国派遣団OBOG、関係者による説明であった。これらは団長を含め団員のほとんどにとって未知なる異国であるドミニカ共和国の歴史、風土、社会、ドミニカ共和国の人々の国民性、特徴を知るに役立ったばかりでなく、ドミニカ共和国派遣団の目標設定、準備作業を円滑に進めるための手掛かりを提供してくれた。

### 2. 出発前研修

9月7、8日と成田のホテルでの合宿研修である。この研修では、ドミニカ共和国での活動のための最終的な準備、確認などを行った。

事前研修が厳しかった故に自主研修中は悩み多く揺れた団員もいたが、無事全員の参加を得た。ここではもう一度団の目標と個人の目標の再確認がなされた。多くの団員は自主研修の成果からであろう個人目標の見直しをしていた。

この2日間の研修は、派遣団の目的である国際青年育成という点から考えると、自主研修ののちの団全員での再確認・見直しをすることができるたいへん貴重な研修であると思う。

### 3. ドミニカ共和国滞在

9月9日から26日までの18日間にわたる訪問は天候にも

恵まれ、ドミニカ共和国の歴史、文化、政治、産業や教育など多くのことに触れ体感できた。事前研修で得た知識をはるかに超える豊富な内容を体験できた。また、青年交流という点でも素晴らしい出会いがあり、多くの友人ができた。

これまで多くの回数を重ねてきたドミニカ共和国派遣の実績を踏まえた日程は、前にも述べたが、豊富かつバランスに富んだ、綿密に設計されたものであった。まずは、ドミニカ共和国を知ることから始まり、そして表敬訪問、歴史、文化を知るための視察、産業を知る視察、国際貢献活動などの視察交流、ホームステイ、ディスカッション、OBOGとの青年交流などであった。

ドミニカ共和国を知るといふ観点では、多くの都市を訪問し、スーパーマーケット、飲食店など国民目線での生活実態体験をし、またさまざまなレベルの人々とお会いをし、交流をした。日本ではあまり経験することのない国境の街ダハホンでの経験（二国間市場、そこでエネルギーギッシュに働く人々、マサクレ（虐殺）川という川の向こう岸にみえるハイチ人の姿）、リゾートホテルでの客は白人、従業員は黒人というのが一般的光景であるなどなどである。

その中で多くの団員が感じたことがある。「豊かさとは何か。幸福とは何か。」である。ドミニカ共和国では首都であろうと小都市であろうと、とかく人々が気さくに声を掛けあっている。あらゆる場所で音楽が流れ、楽しそうに生活している。あまり細かいところに気をかけないおおらかな国民性がいたるところ垣間見えた。町の雰囲気は、ふしぎにすさんだ気配はなく、むしろ牧歌的などかさが流れている。そこに流れているどかさは、貧しいながらも、いや貧しいからこそ人々が身を寄せ合うように暮らす家族に代表される共同体の感覚であるように思えた。日本では高度成長を遂げて物質的な貧しさからは抜け出すことができたが、その代わりに、無縁社会と呼ばれるような精神的な貧しさに直面するようになってきている。このような状況を感じたのであろう、ある団員が下院議長に質問をした。それは、ドミニカ共和国は今経済成長をと努力されているが、この国のもっともよい面“家族を大切にするとか、のどかさなど”が失われるのではというものでとても印象的であった。

つぎに表敬訪問についてであるが、大統領、下院議長、青年省大臣、サント・ドミンゴ自治大学学長、そのほかに日本国大使館、国際協力機構（JICA）などを訪問した。特記すべきは、大統領選挙及び上下院議員選挙が5月15日に実施され、8月16日の大統領就任式、並びにその後の組閣などの多忙な時期にもかかわらず、大統領とお会いする時間をとっていただき、それも1時間以上にわたるものであったことである。これもこの交流事業が毎年

実施され、ドミニカ共和国政府などが高く評価しているからだと思った。この関係は失ってはならず、毎年交流事業はつづけていくべしと考えた。一国の現職大統領にじきじきにお会いすることはなかなかできない。これは名誉ある待遇であり、友好関係の増進という観点でも、また国際青年の育成という観点からも意義深いことであった。というのも人は立派な人に会えば会うほど成長するからである。特に青年にとっては。その会見も、前にも述べたが、単なる儀礼的な会見ではなく、1時間以上にわたる団員たちの質問に答える形で大統領自ら、政治理念、具体的な政策を語ってくれた。その熱意のこもった語り口、眼差しの迫力は、いかに一国の指導者が全身全霊をもって国家運営にあたっているかを物語っていたが、その一方で大統領になったのも運がよかったからとさりとて言い放つその姿に、団員一同、深い感銘を受けたものであった。大統領選61.74%の得票をかちとるといふ圧倒的に強い大統領の姿がそこにあった。そして、2時間後には大統領府のホームページには会見の様子がアップされており、団員一同喜びの声を上げた。

国際貢献活動視察交流について述べる。このプログラムは、国際協力機構（JICA）のドミニカ共和国事務所本部での概括的活動内容説明、引き続いての本部調整員からの詳細説明、そしてJICAボランティアの案内による小学校のサッカー指導活動、ピーナッツ工場の指導活動などの現場視察、その後帰国前でのこれらお世話になった方々との夕食懇談会で構成されていた。それぞれ印象深いものであったが、活動の計画、その実地の状況、それに携わる人々の表と裏の姿を垣間見ることができたと思う。JICAの援助事業は実にいろいろなところで様々な活動が行われていることに目を見張ったのではないだろうか。現在この国で必要とされているところに着目して現場の関係者と連携しながら試行錯誤しながら成果を上げ信頼をかちとっていることに感心したに違いない。しかし、一方では援助されることは当たり前だと思う自国民を保護する立場の指導者の姿がそこにはあったのも否めない。

つぎにホームステイ、大学でのディスカッション、OBOGとの青年交流など交流について述べる。

ホームステイは団員たちが最も楽しみにしていた行事である。それぞれ1人または2人ずつに分かれてホストファミリーに迎えられて、様々な表情を浮かべホームステイ先に向かっていった。ダンス、パーティー、海水浴、史跡めぐりなど期待通りの楽しい2泊3日を過ごしたようだ。しかし、その一方で、かつての宗主国スペインなど白人系が多くを占める支配層とアフリカから奴隷として連れてこられた黒人系及び混血系が大半となる貧困層の間の格差の問題はこの国の大きな課題だというのが、この実態に接した団員にとっては日本と比較してみても

質の違い大きさの違いに考えるところが多かったように見受けられた。同世代学生たちとのディスカッションはセント・ドミンゴ自治大学で2日間にわたって行われた。海べりのモダンな設計のカラフルな校舎が点在する広大なキャンパスがあり、その一画で本部キャンパスの学生、地方から派遣された大学生、そして日本団員との教育、環境、文化についての討議が行われた。多くの戸惑いと長所短所の発見があり、議論の深まりと弁論技術の習得が図れたように感じた。

交流、コミュニケーションという点で印象深いことがある。このドミニカ共和国での滞在中、数多くのドミニカ共和国の人々と交流した。英語が話せる人、話せない人、子供、大人、老人、大学学長・教授、大統領、国会議員、大臣などなどである。その中で学んだものがあった。多くの団員が強く感じたに違いない。ドミニカ共和国ならではの音楽や踊りを通じたコミュニケーションというものの有効性である。確かに、他国の人とコミュニケーションを取る際に英語をはじめとする共通の言語を使用して相互理解を図ることは有効であると思うが、それ以上に今回の滞在中では音楽や踊りを共有して仲を深めることができることを知らされた。どんなに人見知りしても、言葉が聞き取れなくても、お互いに手を振りあい、音楽や踊りを共有すればなんとなくわかりあえたような気になるのだ。専門的な知識や言葉などのスキルが足りなくても、表情、身振りや手ぶりなどあらゆる手段を使い、自分から積極的にコミュニケーションをとれば、外国人との交流ができると団員たちは体験できたと思う。

また、多くの方々との出会いの中で印象深く団員たちの心に映ったのは日本からの移住した方々やその2世、3世とのそれであろう。1956～59年の間、ドミニカ共和国移住がなされたが、入植した農地は募集要項とは違い農業に適さない土地であり、多数の入植者たちが苦しんだ。1961年以降、入植地からの撤退や帰国事業が国費で行われた。帰国されたり、他国に再入植された方も多くおられたようであるが、残った方々は、努力に努力を重ね、今では現地で尊敬されるような存在になっているとお聞きした。今回の派遣団は最初の日本人入植地であったダハボンを訪問した。ダハボンの日本人会館での夕食懇談がその中心であったが、移住25周年記念碑、日本人墓地、日系人経営のスーパーマーケットにもうかがう機会もあった。御苦労された日系移住人の方々との交流は、現地に根付き骨をうずめる方々の生き様として、団員の胸に深く刻み込まれたに違いない。

派遣団の運営にもいろいろな葛藤があった。団員たちは、毎日、情報の共有のため及び団の結束のためと称して夜遅くまで議論していた。その中で、団として組織体の運営とその構成員個人の自由・成長との兼ね合いにつ

いていろいろ議論があったようだ。その中で常識ある大人の団体行動の在り方は小中学校の団体活動訓練とは違うことがわかってきたように思われ、自主的な動きもみられるようになった。

#### 4. 帰国後研修及び国際青年交流会議

この研修は、この事業での成果の取りまとめ、事後活動の事例紹介などを行い、今後の活動と青年健全育成活動への理解を促進するためのものであるが、国際青年交流会議について述べる。この国際青年交流会議では、6か国から集まった招へい青年と文化、教育、環境についてディスカッションを行った。それぞれの国が抱える問題を共有して解決するためにはなにが必要なのかと話し合う過程は、新しい気付きの連続であったと思われる。コーディネーター・アドバイザーの力量不足のためだろうか、気付きだけで具体的に何ができるのか、何をするのかなどさらに深まった議論に時間はあるにもかかわらず導けなかったのは残念であった。しかし、今回日本に集まり、真剣に、抱える問題や将来について話し合った仲間が世界にいるという事実は計り知れなく大きいものだったと思った。

#### おわりに

プログラムを終えた今、改めて振り返ると、ドミニカ共和国滞在中のアメリカ・ニューヨークにおける爆発事件、帰国直後のハリケーンのドミニカ共和国襲来などがあつたにもかかわらず、大きな影響も受けず、大変運に恵まれた、かけがえのない時間、本当に貴重な体験だったと思っている。日本や現地でプログラムの企画・運営にご尽力いただいた、両国大使をはじめとした大使館の方々、内閣府、(一財)青少年国際交流推進センターの皆様、そして現地で様々な形でご支援いただいたコーディネーターの方、その他本プログラムにかかわりくださったすべての皆様、そのご家族の皆様にご心から感謝申し上げます。さらには副団長の滝川さんの功績は大きかったことを強調したい。

今回のプログラムに参加した団員が、この貴重な国際体験を通して、国際青年として成長し、国際的な活躍をされるのに、少しでも役にたつプログラムであったのであれば、団長として本望である。